

アホム王は、王室のモイダムを含む全ての土木工事の建設と維持を担当する特別官僚チャンルン・フカンを任命した。チャンルン・フカンは最高位にある九人のフカンの一人であった。モイダムを保護・維持するために、モイダム・フカンと呼ばれる特別官と、モイダミヤ (Moidamiya) と呼ばれる警備集団が置かれた。

モイダムは宝物庫としても知られていたため、ムガル帝国からイギリス時代、さらには地元の人々に至るまで、多くの略奪者を引き寄せ、何度も略奪を受けた。モイダムの平面図の最も古いスケッチは、1848年6月にベンガル・アジア協会誌に掲載されたもので、当時のアッサム首席補佐官T・プロディ大尉の依頼により、1840年にモイダムの発掘を監督したC・クレイトン軍曹によって描かれた。クレイトンとその調査隊は、指輪、銀製の楊枝入れ、耳飾り、ゴブレット、大皿、小さな金製の石灰入れなどを発見し、これらは後にベッドフォード氏によって購入された。記録によれば、1905年、多くのアホム王女の立ち会いのもとで1基のモイダムが発掘されたが、その後については何も知られていない

2000年から2002年にかけて、ASI (インド考古局) グワーハーティ管区によるモイダム第2号墳の発掘調査で、いくつかの遺物が発見された。その中でも特筆すべきは、象牙製の装飾品と木製品の破片である。木製品の一つは、おそらくスタンバ (柱) の形にデザインされた皿付き台 (サライ、sarai) の軸部であろう。象牙製パネルの一つには、アホム王家の紋章である神話上の龍が、象やクジャク、花模様の精緻な彫刻とともに描かれている。その他に発見された遺物には、木に取り付けられた銅製品の破片、鉄製の鉤、鉄製のピン、小型の象牙装飾品、円形の象牙ボタン、カウリー貝、金のペンダント、そして数個の鉛製砲弾がある。

このモイダムの正確な築造年代や被葬者は、文書記録がないため特定が難しい。しかし、出土した遺物やレンガ構造の性質、およびアホムがヒンドゥー教を受容した後の火葬習慣に関する年代記 (ブラジー、Buranjees) の記述から、このモイダムの築造は18世紀前半に属すると考えられる。

ヒンドゥー教の影響を受け、アホムも死者を火葬するようになった。それにもかかわらず、この埋葬制度は、現在もアホムの司祭階級 (モーチャイ、モーフン、モーブラン) や、チャオダン (王室護衛) 氏族によって続けられている。

2024年7月26日、モイダムは世界で最も貴重な遺産の一つとして認められ、インドで43番目、北東インドでは初の文化遺産として、ユネスコ世界遺産リストに登録された。この画期的な出来事は、モイダムを州の豊かな歴史と文化遺産を証明する存在として、世界的舞台に押し上げるものである。



アクセス方法

空路

最寄りの空港はモハンバリ空港 (ディブルガル) で、距離は86km。

鉄道

最寄りの鉄道駅はシムラグリ駅で、距離は13km。

道路

チャライデオ・モイダム遺跡は、シバサガル (28km)、ナジラ (18km)、ソナリ (20km) から道路でよく結ばれている



出典
インド考古局 グワハティ管区

写真提供
マダブ (Madhab)、カンコン (Kangkong)、グナングシュ (Gunangshu)

お問い合わせ先
観光案内所
ツーリスト・バンガロー
シバサガル
電話: +91 3772 222394、+91 86386 87074
メール: assamtourism.sivasagar@gmail.com

発行
アッサム州政府観光局
ステーション・ロード、グワハティ 781001、アッサム、インド
電話: +91 361-2547102 / 2542748
メール: directorate-tourism@assam.gov.in
ウェブサイト: www.directortourism.assam.gov.in

SNS
Facebook: @aweassam, X: @aweassam, Instagram: @awesomeassa



チャライデオのモイダム

(Ahom王朝の墳墓群)

—アホム王朝 700年の墳丘墓制—

UNESCO

世界遺産リスト (文化遺産) 登録



紀元13世紀から19世紀初頭にかけて、アホム族はアッサムを支配した。彼らの長期にわたる統治は、この地域に政治的および文化的統一を確立し、経済的安定をもたらした。これにより、さまざまな民族集団を一つの行政のもとにまとめ、新しい国民性と文化の進化の過程が進んだ。彼らの婚姻同盟と社会・文化的同化の政策は、複合的な国民性の成長の道を開き、後に「アッサム人」として認識されるようになった。

伝統的および文化的に、アホム族は大タイ（タイ・ヤイ）民族グループの一員である。1215年、アホム族はモン・マオまたはモン・マオ・ルン（現在の中華人民共和国雲南省西南部の徳宏タイ族景頗族自治州）から移住した。彼らはマオ・シャン王子チャオルン・スカファの指導のもと、パトカイ丘陵を通過してブラマプトラ渓谷上流域に入った。彼はアホム王朝の初代国王、またはチャオファ、あるいはスワルガデオ（天の主）となり、最初のアホムの首都チェライドイ（現在のチャライデオ）を建設した。

7世紀末までに、アホム族は600年に及ぶ統治の中で、ブラマプトラ渓谷全域に王国を拡大した。チャオルン・スカファの有能で聡明な後継者たち、スファンムン（1497-1539）、スクレンムン（1539-1552）、プラタブ・シンハ（1603-1641）、ガダダル・シンハ（1681-1696）、ルドラ・シンハ（1696-1714）、シバ・シンハ（1714-1744）、プラマッタ・シンハ（1744-1751）、ラジェシュワル・シンハ（1751-1769）らは、イスラム教の支配者、強大なムガル帝国や地方支配者からこの地を守った。これにより、この渓谷に平和と繁栄の時代が訪れ、多民族的なアッサム文化が発展した。

アホム族はその統治期間中、多くの世俗的および宗教的建築活動を行った。その中で世界的な注目を集めているのが、モイダム（埋葬塚）建築である。他の地域にはこれに匹敵する葬送建築はなく、その様式は独特であり、彼らの異国的な起源をしのばせるものである。

アホム族は伝統的に死者を土葬した。モイダムはアホム王族や貴族の埋葬塚である。「モイダム」という言葉は、タイ語の「プラン・マイ・ダム（Phrang-Mai-Dam）」または「マイ・タム（Mai-Tam）」に由来する。プラン・マイは「墓に入れる、埋葬する」を意味し、ダムは「死者の魂」を意味する。

モイダムはアッサム上流域の各地区に見られるが、アホム族の初代首都であるチャライデオは、ほぼすべての王族の墓地であった。チャライデオはシヴァサガルの東28kmに位置する。初代国王チャオルン・スカファは死後、すべてのタイ・アホムの宗教儀礼を行った上でチャライデオに埋葬された。それ以来、タイ・アホムの王、王妃、王子、王女はチャライデオに埋葬されることが慣例となった。600年間の統治の間、この場所は崇敬される聖地となった。

モイダムの外観は半球形で、その大きさは小さな塚から高さ約20メートルほどの小丘まで、埋葬される人物の権力や地位、資源によって異なる。モイダムは主に3つの主要部分から成る。埋葬室（Vault/Chamber）、それを覆う半球状の土盛り、その上に年次供養のためのレンガ造り構造物（チャオ・チャリ）があり、さらに基部を囲む八角形の境界壁と、西側にあるアーチ型の門が設けられる。ただし、小規模なモイダムにはこれらすべての要素が備わっているわけではない

かつて、地下室（ヴォールト）は堅固な木材の柱や梁で造られていた。おそらく、ルドラ・シンハ王（在位1696-1714年）およびその後継者の時代から、木造の地下室は石やレンガ造りのものに置き換えられた。



チャンルン・フカンの年代記（Chang-rung Phukanar Buranjee）によれば、モイダムのレンガや石は、石灰（石灰石およびカタツムリの殻）、豆類、樹脂、麻、糖蜜、魚などを混ぜたモルタルで接合されていた。



地下室の内部には、6か月から2年に及ぶ儀式を経て、死者の遺骸が安置された。アホム王は、衣服や装飾品、武器などの日用品を含む財宝とともに埋葬された。アホムの年代記には、大量の貴重品や、生きたまあるいは死後の従者が王族や高官とともに埋葬されたと記されている。生き埋めの慣習は、ルドラ・シンハ王の時代（1696-1714年）に禁止された。



年代記によれば、王や王妃の遺体を埋葬することを許されていたのは、ガルファリア（Gharphalia）とラクフラカール（Lakhurakhar）のケル（khel：特定の仕事を割り当てられた人々の集団で、1,000〜5,000人で構成）だけであった。アホムの年代記には、ウリアム（Bescoffia javanica）と呼ばれる特定の木材で棺が作られたとあり、この棺はルン・ダン（Rung-dang）と呼ばれた。ルン・ダンは、ガルファリアとルクフラカンのケルの人々だけによって、ケコラ・ドラ（Kekora dola：アッサム式の輿）に載せて墓地まで運ばれた。半球状の土盛りの下にある巨大な地下室はカレン・ルン・ダン（kareng-rung-dang、棺）と呼ばれ、棺は東西方向に配置された。カレン・ルン・ダンに入ることが許されたのはラクフカンのみで、遺体を安置した後、彼らは入り口を粘土モルタルで固定した巨石で封じた。

チャライデオには、遺体を運ぶための専用の道があり、これをサ・ニア・アリ（Sa-nia-ali：サ=死体、ニア=運ぶ、アリ=道）と呼んだ。また、遺体を儀礼的に沐浴させるための専用の池もあり、これをサ・ドゥア・プクリ（Sa-Dhua-Pukhuri：サ=死体、ドゥア=洗う、プクリ=池）と呼んだ。